

ラグビーレフリー養成のための制度とプログラムに関する研究

学籍番号 1755006

氏名 杉浦 周平

指導教員 (主) 西機 真

(副) 向山 昌利

キーワード: ラグビー, レフリー, 育成, 大学

【緒言】

W杯のように世界中の人々が注目するラグビーの試合から、地域の子ども達試合まで、影で支え大きな役割を担う者がレフリーである。過去のW杯においてティア1と呼ばれる強豪国からレフリーが呼ばれている現状があり、競技力が高い国ほど国際舞台で活躍する優秀なレフリーが生まれていると言える。まさに選手の競技力向上と優秀なレフリーの存在は、ラグビーの試合を盛り上げる上で車の両輪と言っても過言ではない。

しかし日本では、1999年のオーストラリア大会へのレフリー参加を最後に4大会連続でW杯に日本人レフリーが誕生しておらず、世界で活躍できるトップレフリーの養成に順調な成果を収めているとは言えない現状がある。

そうした中、今後日本人のレフリーが世界の舞台で活躍するためには、20代のレフリー養成を行っていく必要性が高まっている。また、他競技のレフリー養成に目を向けると青山(2015)は、『学生審判員を育成していくことは、日本における審判員の育成を考える上で重要である』としている。

このことから、私は日本ラグビーにおける若手レフリーの養成において、大学生レフリーの養成が必要であると考えている。しかし、大学生レフリーの養成について、

JRFUや地域組織などが取り組んでいる事例はなく、各々の大学における取り組みについても実態は把握できていない。

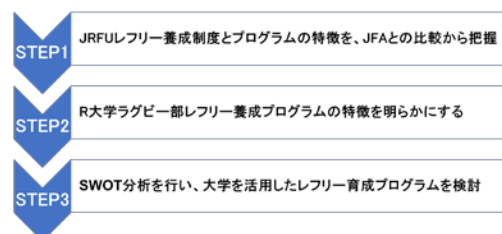
また、筆者がR大学ラグビー部のレフリー養成プログラムで活動をしていた経験から、活動をしていく中で、「レフリーの資格制度が更新されない」「資格を昇格するための必要な基準がわからない」といった課題や疑問を持った。

そこで本研究では、今後の日本ラグビーの競技力向上の一躍を担うであろう若手レフリー養成のための、大学生レフリーの養成プログラムについて調査研究を行う。

【目的】

JRFUのレフリー制度やプログラムの特徴を明らかにし、それらの特徴の長所を伸ばし、短所を改善していくために、R大学ラグビー部を活用するレフリー養成プログラムの再構築に向けた提案を行うことである。

【研究の構成】



【STEP1】

日本国内のラグビーとサッカーのレフリー養成制度とプログラムの資料調査と、レフリー養成責任者へのインタビュー

(1)資料調査

ューを行った。

審判員制度比較表		
	ラグビー	サッカー
競技人口	92,643人	937,893人
審判員登録総数	4,913人	264,206人
競技人口とレフリー人口の比率	5%	28%
資格登録制度	なし	あり
データベース	なし	あり
資格更新制度	なし	あり
資格の有効期限	なし 全ての級	当該年4月1日～3月31日 全ての級
階級制度 (公表されているデータのみ)	A級:5名 A1級:10名 A2級:9名 女子A級:2名 B級 C級	1級:212名 女子1級:54名 2級:3495名 3級:34,480名 4級:225,965名
中・長期的な国内審判員強化戦略	ある	ある
W杯派遣 過去5大会比較	ワールドカップ -過去4大会派遣なし(2003、2007、2011、2015) -1名参加(1999) オリンピック -派遣あり(2016) -2名参加 -女子決勝のインゴールジャッジ	FIFA ワールドカップ -5大会派遣(2002、2006、2010、2014、2018) -8名参加(2002、2006、2010、2014、2018) -3位決定戦主審、準決勝主審、決勝戦第4審判
備考	ラグビー活動審判員数について、関西協会・九州協会については2015年度のデータ、関東協会は2016年度のデータを使用	

- 『JRFU 都道府県別レフリー登録数』
- 『JFA 都道府県別審判員登録数』
- 『JRFU 普及戦略 2016-2020』
- 『JRFU 普及戦略 2016-2020KPI』
- 『JRFU 審判部門ハイパフォーマンス活動に関するレポート』

JRFU レフリー制度の特徴として挙げられた内容を「普及・育成・強化」という視点から検討を行い、その上で、長所と短所に分けて、特徴の整理を行った。(表1)

結果

	長所	短所
普及	ラグレフリー(TRR)養成といった、普及事業の開催	サッカーと比較すると、選手数に対して低いレフリーの割合 資格登録制度がない
育成	階級ごとに担当できる試合が決まっている 指導者育成	資格更新制度がない 資格の有効期限がない 階級ごとの人数が把握できていない
強化	レフリーアカデミーの開催 海外レフリー協会との連携	W杯へのレフリー参加が1999年以降できていない トップレフリーが高齢化している

(2)インタビュー調査

①調査方法

JRFU 審判委員会部門長 A 氏及び、JFA 審判委員会副委員長 B 氏に半構造化インタビ

結果

設問	JRFU A氏からの回答	JFA B氏からの回答
レフリー養成の意義	世界に通用するレフリー育成	チーム・選手の手を引き出せる高いレベルの審判員を派遣 世界基準を意識した、審判員、審判インストラクターの養成 審判としてのサッカーキャリアの構築
レフリー養成の現状の課題	・レフリー養成のスタッフが日本はアマチュアであるのに対し、海外はプロ ・ワールドクラスのレフリーを担当した指導者がいない ・資格登録制度の整備が出来ていない ・更新制度がない ・WRレフリーに関する情報を入手するルートが少ない	世界基準の審判員の養成 -トップレフリーの強化 審判員の普及推進と育成 -チーム/選手の手を引き出せる高いレベルの審判員の育成 -審判インストラクターの能力向上と機会増大 -JFAレフリーアカデミー構想の実現 地域・都道府県協会審判委員会との連携強化 レフリー養成のための情報伝達、共有ネットワークの構築・維持・改善 競技規則の理解促進 審判としてのロードマップの策定

その結果、JRFU のレフリー制度とプログラムの特徴として、レフリーをトップレベルまで引き上げる制度やプログラムといった強化側面については、充実しているが、レフリー資格保持者の質を引き上げるための更新講習会が開かれていないなどがわかった。

特に、今後 20 代の若い世代のレフリーが世界で活躍するためにも、育成分野を充実させなければならない点から、レフリー育成プログラムに焦点を当て調査を行った。

(2)レフリー育成プログラムについて

ーC 氏に対して半構造化インタビューを行

強みStrength	弱みWeakness
ヒト A:学外スタッフのレフリーコーチ B:ラグビーを専門領域にする教員 C:優れた大学教員 D:大学トップレベルのラグビー部 E:ラグビー部スタッフ モノ F:ラグビー場 G:スポーツ健康センター H:大学講義室 カネ I:利用料無料 情報 H:大学教員の知的財産 I:Jスポーツ界との繋がり J:ラグビー部のネットワーク	ヒト a:学内レフリーコーチ b:レフリー希望の学生 c:レフリー専門の教員 モノ d:レフリー育成プログラム カネ e:学生の負担(移動費、講習費等) 情報 g:国内、国外のラグビーレフリーの事情に精通している人材 h:レフリーネットワーク
機会Opportunity	脅威Threat
制度 1:レフリーアカデミー 2:海外レフリー協会との連携 3:資格階級制度 3:20代レフリー養成の必要性 プログラム 4:マッチオフィシャルレベル2コース評価法	制度 I :三地域協会公認B級レフリーと、都道府県協会C級レフリーの実態数 II :レフリー資格の更新制度がない。 プログラム III:資格受験のための要綱 VII:学習の自己研鑽

『JRFU 普及戦略 2016-2020』と青山(2015)の先行研究を基に、ラグビーの日本協会公認 A2 級レフリーとサッカーの地域協会公認 2 級審判員の昇級認定までのプログラム内容について比較を行った。

上記の結果の内容を「要綱」「カリキュラム」「評価基準」「評価方法」から、特徴を長所と短所に分けて整理を行った。

結果

	長所	短所
要綱	要綱が開示されていない	
カリキュラム	MO2が基礎知識	学習が各自の自己研鑽
評価基準	MO2の評価基準を採用	推薦基準を満たすだけの講習会が国内で開催されていない
評価方法	MO2の評価方法を採用	限られた評価を得れる人材

この結果から、JRFU のレフリー養成制度と育成プログラムに対応する、大学ラグビー部のレフリー育成プログラムの再構築が必要であると考えられる。

【STEP2】

R 大学ラグビー部レフリー育成の現状把握

(1)インタビュー調査

R 大学ラグビー部レフリー部門学生リーダー

った。

結果

設問	R大学ラグビー部 C氏の回答
レフリー養成の意義	大学卒業後のキャリアとして必要な準備選手だけではなく、レフリーとしても活躍地域への貢献
レフリー養成の現状の課題	選手とレフリー活動の両立 学内に専属のレフリーコーチの不在 レフリー希望の学生が少ない

(2)実態調査

JRFU のレフリー制度とレフリー育成プログラムの長所を伸ばし、短所を改善していく、一つの解決策として R 大学ラグビー部のレフリー育成がモデルになると考える。しかしながら、R 大学レフリー育成プログラムにも課題は多くその可能性について検討するに当たっては、西機 (2010) の検討方法を基に、R 大学ラグビー部のレフリー育成の強みと弱みを、「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」という経営資源から、R 大学ラグビー部のレフリー育成の現状分析を行った。

表 1 クロス SWOT 分析

強みStrength		弱みWeakness	
A, B, C, D, E × 1, 4	・20代のレフリーを集めた講習会や研修会の開催 ・大学ラグビー部の試合や練習を使った実技研修会の開催 ・大学教員によるレフリーに必要な能力の学びの場の提供	a, b, c × 1, 4, 5	・大学生を対象としたレフリーアカデミーを開設 ・WRの育成プログラムを活用したレフリーコーチの育成
F, G, H × 1, 4	20代レフリーを集めて、大学施設を活用したレフリートレーニングの開催	d × 5	WRのプログラム内容を、大学を活用したレフリー育成プログラムに組み込む
I × 1, 3, 5	コストがかからない講習会や研修会の開催	e × 4	学生レフリーに対する、経済面での支援活動
J, K × 2, 5	20代レフリーに対してラグビーやスポーツ科学に関する、最先端の情報の提供	f, g × 2, 3	・大学生のレフリーを育成している大学のモデル校 ・JRFUとのネットワークを作る
B, C, D, E × I, II	JRFUに対して、大学ラグビー部を活用するレフリー育成プログラムを、新たなJRFUのレフリー普及戦略として提案	a, b × III, IV	学内レフリー指導者育成
F, G, H × III, IV	講習会や研修会で、大学施設を活用	d × III, IV	レフリー育成プログラムの具体的内容について再構築
I × III, IV	コストがかからない講習会や研修会の開催	e × I, II	JRFUのレフリー育成の一環として、学生レフリーへの支援
J, K, L × I, II	ラグビーやスポーツ科学の最新情報を、JRFUや地域協会と共有	f, g × I, II, III, IV	限られた情報(レフリー数、昇格基準など)の中で、育成を行うためのプログラム構築

その結果、大学の知的資源を活用することが出来ることが強みとしてあげられ、学内にレフリー育成を専門とする人的資源がないことが弱みとしてあげられた。

【STEP3】

R 大学ラグビー部のレフリー育成の強みと弱みを内的要因、JRFU の制度と育成プログラムを外的要因として整理をし、整理した情報を効果的に活用していき、プログラムの再構築の提案を行う観点から、「SWOT分析」を活用して検討を行った。(表 2) (中塚ら(2007))

【まとめ】

本研究の目的は、JRFU のレフリー育成に関する特徴の長所を伸ばし、短所を改善していく可能性のある、R 大学ラグビー部のレフリー養成プログラム再構築をすることであった。STEP 3で挙げられた、可能性の要因から、より具体的に再構築のための提案を行うために、クロス SWOT 分析を活用した R 大学を活用したレフリー育成プログラムに関する検討を行った。(表 3)

その結果、

- ① 大学の施設や知的財産を活用した、プログラムコンテンツ。
 - ② JRFU に対して、R 大学ラグビー部を活用するレフリー育成プログラムがレフリー育成のモデルになることのアピール
 - ③ WR のプログラムコースを活用し、学内にレフリーコーチを育成
 - ④ A 級など高いレベルを目指せるレフリー育成環境の整備
- をレフリー養成プログラム再構築のための提案として、行っていく必要があると考えられた。

【参考文献】

- 1) 青山健太. "日本におけるサッカー審判員育成システムに関する研究: 関東大学サッカー連盟の学生審判員育成に着目して." 2015
- 2) 中塚雅也, 深町拓司, and 星野敏. "SWOT 分析を応用したワークショップ手法の開発." 2007
- 3) 西機真. "大学を基盤にしたラグビー強化拠点の構築について." 2010